

の女君のいとくうつくしきぞおほしける、それぞなを覺しすてざりける、たふのみねまでこひしさはつゞきのぼりければ、は、君の御もとに、それによりてぞをとづれ聞え給ける、かのちご君も、屏風のゑの男をみては、て、とてぞこひきこえ給ひける、これは物がたり○多武峯に○少將物語につくりて、よにあるやうにぞきこゆめる、あはれなることにこのことにぞよをはいふなる、

〔尊卑分脈五〕

藤原氏 高光右少將從四下 如覺號多武峯少將入道

〔撰集抄四〕永眼大僧都通世事

昔山階寺にやむごとなき智者にて、永眼大僧都と云入侍き、唯識因明を明にせりとぞ、世をそむく心ふかくして、寺のまじはりうるさく覺て、權長官まで至り侍けれども、本意ならず侍て、人にもまられ侍らず、かきつけがごとくして、跡を暗くし侍ければ、弟子どもさはぎ迷ひて、あそこ爰求め尋けれども、更にみえ侍らず、かくて月目を重ねければ、弟子共も云がひなく覺えて、ちりちりに成ぬ、此僧都信濃國木曾と云所に、落留給へり、或時は山深く思入て、つねなき色を風に詠、或時は里に出て、便なきひなのすみかの戸ほそに立寄て、水をくみ、薪を取て、與などぞせられける、いかなる由ある人やらんといへども、法文のかたには、もてはなれたるさまをぞふるまひ給へりける、玄賓の昔の跡に、露もかはる事侍らず、山田を守わざはいかゞ侍けん、つぶねとなりて人に隨ひ、みなれ棹さして人を渡すいとなみは、めづらかなる事にも侍らざりけるとかや、○下

〔撰集抄九〕大江貞基入唐求法事

むかし大江の貞基といふ博士ありけり、身は朝に仕へ、心は隱に有て、常に人間の榮耀は因縁あさし、林下の幽閑は氣味ふかしと思ひとりながら、さるべき縁にあはざる程にもと、りをさ、びて世の中に交て侍りけるが、年比さりがたく覺えける女の身まかりけるより、ふつに思ひとりて、清水の上綱と聞え給へりし智者の御もとへ行て、かしらおろし戒うけ給へりにける、○中